

## 平城第 365 次調査（国指定名勝旧大乗院庭園） 現地説明会資料

## ・調査の経緯と経過

奈良文化財研究所では、旧大乗院庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受けて、本庭園の復原整備にむけた資料を得るため、1995 年（平成 7）から継続的な発掘調査を実施しています。発掘調査は、本庭園の中心に位置する東大池の岸辺にそってすめ、1998 年（平成 10）からは、東大池西岸の西小池跡地を対象に行ってきました。

今回の調査は、東大池の西北隅と西南隅を対象に、10 月 1 日から開始し、11 月 15 日現在、大乗院庭園が栄えた江戸時代の遺構を中心に、近代にいたる各期の遺構を検出しています。また今回の調査は、東大池の周辺を対象にした最後の調査で、これまでの調査とあわせて、今後おこなう陸部の調査（庭園西側・御殿跡地）につながる成果が期待されます。調査面積は西北隅（北区）約 218 m<sup>2</sup>、西南隅（南区）約 170 m<sup>2</sup>の計約 390 m<sup>2</sup>で、調査は現在も継続中です。

## ・旧大乗院庭園について

大乗院は、一乗院とならび両門跡とよばれた興福寺の門跡寺院です。大乗院は寛治元年（1087）に興福寺の北方、現在の奈良県庁のあたりに開かれました。治承 4 年（1180）に平重衡の南都焼き打ちによって焼失し、翌年に元興寺の別院である禪定院がおかれていた現在の場所に再興されました。宝徳 3 年（1451）には徳政一揆で再び焼失しますが、尋尊大僧正の尽力によって、建物ばかりでなく庭園についても精力的な整備が行われました。このとき存続にあたったのが、室町時代を代表する庭師・善阿弥で、当時から名園として注目されていたようです。室町時代に改修された庭園の基本的な姿は江戸時代のはじめまで続いたと考えられており、その後は中世の作庭を基礎としながらも、豊かな経済力を背景に庭園の改修をくりかえし、明治時代にいたるまで南都随一の名園として栄えました。

明治時代以降の旧大乗院庭園 明治維新の神仏分離・廃仏毀釈の流れの中で、大乗院門跡も慶應 4 年（1868）に廃絶となります。廃絶後すぐに御殿は個人宅に転用されますが、明治 16 年（1883）には御殿をすべて取り壊し、跡地に飛鳥小学校が建設されました。また、明治 20 年（1887）頃には荒地の造成にともなって、大乗院跡北辺でも掘削をとおすなどの大規模な土木工事が行われたようです。飛鳥小学校は明治 33 年（1900）に現在の紀寺町に移転し、大乗院跡は荒地となりますが、明治 38 年（1905）には外国人用のホテル建設の話がもたがります。そして明治 42 年（1909）、奈良ホテルが開業し、これ以降大乗院跡は奈良ホテルの前庭としての役割を担いつつ、現在にいたっています。



図1 旧大乗院庭園 周辺図  
 $s = 1:8000$

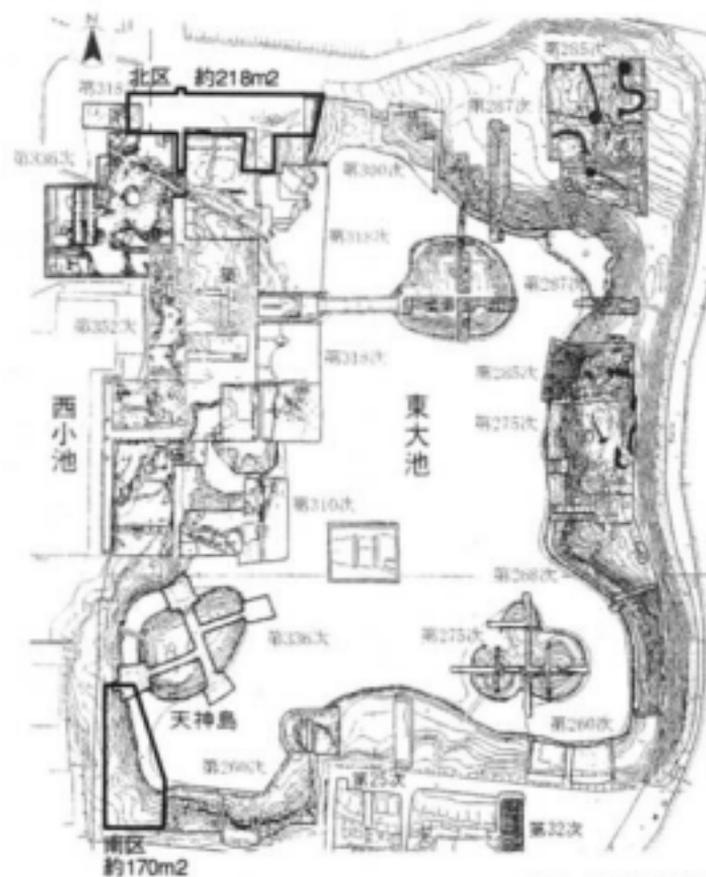


図2 旧大乗院庭園 調査区位置図  
 $s = 1:800$

## ・調査の成果

今回の調査は、二つの調査区を東大池西岸の南北という、ややはなれた場所に設けています。ここでは、西北側の調査区を「北区」、西南側の調査区を「南区」と呼んで、それぞれについて説明します。

### 北区

北区は、江戸時代に描かれたとされる絵図、『大乗院四季興景図』（興福寺蔵）と『大乗院殿境内図』（春日大社 岡本氏蔵）を比較すると、様相がずいぶんと変わっていることがわかり、江戸時代の中でも何度かつくり替えられていることが予想されました。

今回の調査では、これらの絵図それぞれに対応すると考えられる遺構を確認し、絵図の作成年代に関する手がかりを得るとともに、大乗院庭園の変遷を解明するうえで重要な知見を得ることができました。さらに、これらの絵図には描かれていない江戸時代の遺構もみつき、この場所が江戸時代をつうじて作庭をくりかえした様子をうかがい知ることができました。

また今回の調査では、大乗院が廃絶となった明治時代の遺構ももともとあった形で検出しています。明治時代以降の大乗院跡については郷土史の資料などから知ることができ、その歴史の概略はすでに述べた通りです。

このように北区では、軒倉曲折を経ながらも庭園として現在まで伝えられた明治時代以降の変遷も資料に沿うかたちで検出し、旧大乗院庭園の中世から現在までの時の重なりをあらためて確認することができました。

### 南区

南区は、東大池の岸辺の様相を確認することを目的とした調査区です。これまでの調査により、東大池の岸辺は、中世以来、積土によってしだいに高く造成されてきたこと明らかになっています。

今回の調査でも、陸部を形成する積土の状態から、江戸時代にはすでに現在と同じような急勾配の岸辺であったことをあらためて確認できました。岸辺の平面形についても、江戸時代末期には『大乗院殿境内図』にみられるような直線的な状態であったことがわかり、同図の資料としての信憑性を裏付けることができました。

これまでの調査では、最上層の積土を、積土に含まれる遺物から、江戸時代の造成と推定してきました。今回の調査では、この積土を掘りこんでつくられた取水用暗渠を検出しました。この暗渠に使われている陶管が明治時代初期の常滑産であることがわかり、遺構の面からも最上層の積土が江戸時代の造成である可能性を示すことができました。

また、詳細な調査は今後の課題ですが、取水用暗渠断形の土層断面の観察からは、本来の池は今よりも西側にひろがっていて、中世以来の積土により陸部が東にはりだした様子もうかがえます。



图 3 南区 遺構平面図 s=1:100

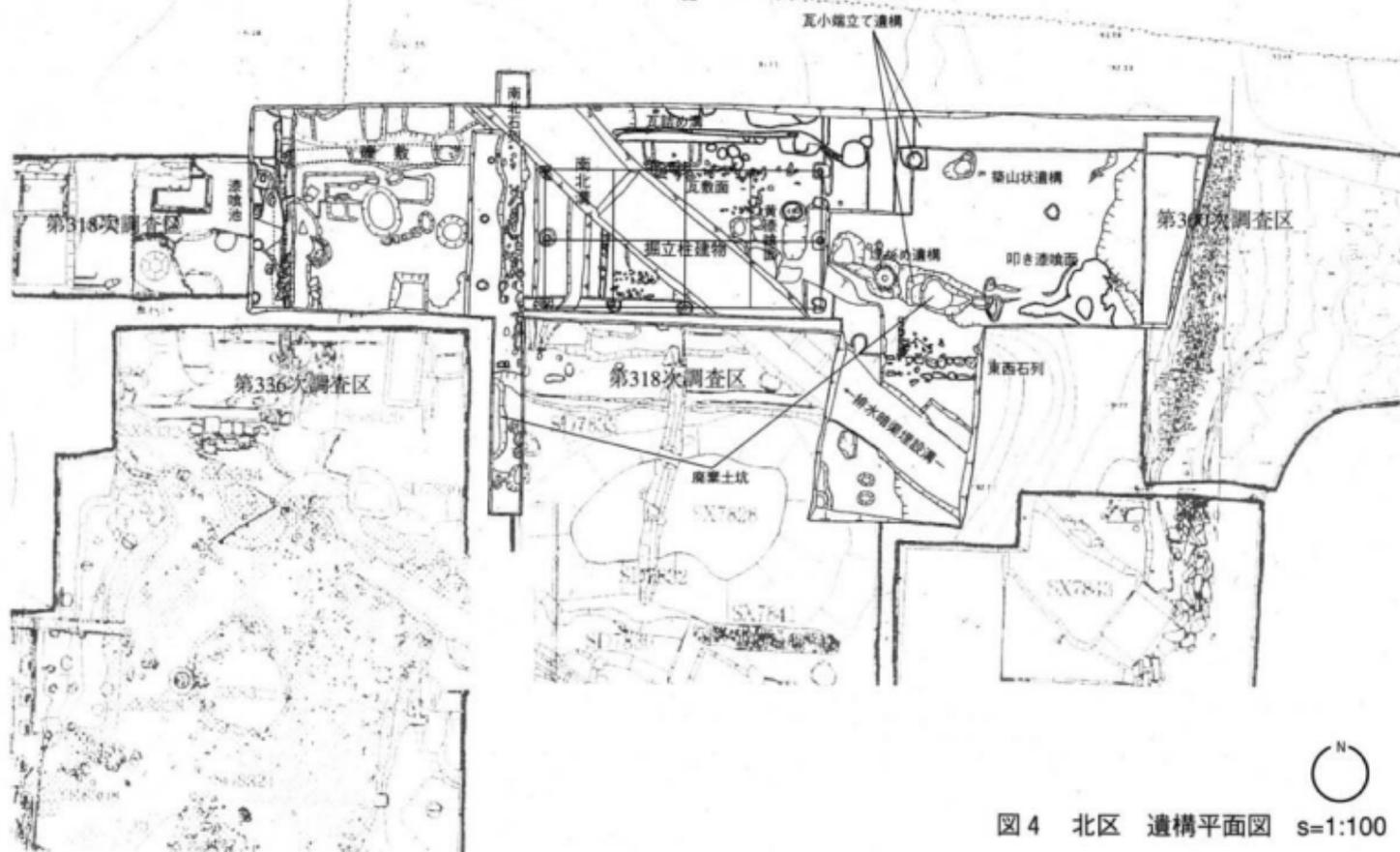


図4 北区 遺構平面図 s=1:100

### ・検出遺構

今回の調査で検出した遺構について時期ごとに説明します。ここでは便宜的に、江戸時代と考えられる遺構をⅠ期、明治時代以降と考えられる遺構をⅡ期と区分します。また北区では、大きく分けてⅠ期の中で3つ、Ⅱ期の中で2つの面で遺構を検出しているので、これらを時代別に、Ⅰ-1～3期、Ⅱ-1～2期と区分します。

### 北区

#### Ⅰ期 江戸時代の遺構

##### Ⅰ-1期

黄白色の粘質土上面で検出した遺構。隣接する第318次(平成13年度)および第336次調査(平成14年度)の遺構検出面にあたる。この面では数多くの遺構が重複して確認され、短い時期にこの場所で作業がくり返された様子がうかがえる。

**礎石** 最下層で検出したし字型をした礎石。直径5cm 大の礎を黄白色土の面から切り込み溝の底にならべて埋めている。用途は現段階では不明。

**南北溝** 調査区を南北へつらぬく深い溝。調査区の南側で西にまがる。隣接する第318次調査区との関係から南から北へくだる溝と思われる。

**獨立柱建物** 調査区中ほどに位置する東西4期・南北2期の獨立柱建物。柱穴の底には20cm 大の礎盤石をおく。遺構の重複から判断すると南北溝より新しい。

**黄漆喰面** 部分的にみられる黄褐色の漆喰による舗装面。部分的にしかのこらないので詳細は不明だが、獨立柱建物にともなうものの可能性が高い。

**漆喰池** (318次調査区) 第318次調査で検出した、池底と壁を黄褐色の漆喰でかためた池。

上述の黄漆喰面とよく似た漆喰を用いており、同時期のもの可能性が高い。

##### Ⅰ-2期

灰青色の砂質土上面で検出した遺構。『大乗院四季真景園』が描く時期と対応し、「開観亭(かみみんてい)」を中心とした庭園施設の一部と考えられる。

**瓦敷面** 平瓦を東西に敷いた舗装面。「開観亭」近辺に設けられた園路であろう。

**瓦詰め溝** 幅10cm・深さ15cm程の溝に、瓦を割って詰めた溝。側面は瓦を小堀立てにおく。構造から判断して上部には土をかぶせていた可能性がたかく、周辺の湿気ゆきと考えられる。

**瓦小堀立て遺構** Ⅰ-2期とⅠ-3期の中間で検出した遺構。側面に瓦を小堀立てにならべて方形および円形の遺構をかたち作る。現在のところ性格は不明、庭園の造作に関係するものと考えられる。

##### Ⅰ-3期

よくしまった椀褐色の砂質土上面で検出した遺構。『大乗院殿境内図』が描く時期と対応すると考えられる。

**東西石列** 30cm 大の石を東西に2列ならべた遺構。その構造や層面にのこる崩落の痕跡から築地層の基壇部であることがわかる。その位置は『大乗院殿境内図』にみえる東西築地層とはほぼ一致する。

**印き漆喰面** 東大池の沿岸部にのこる黄白色の漆喰による舗装面。東大池東岸の調査(第275次・第278次調査)でも同様の舗装面を検出しており、沿岸をめぐる園路と推定している。

**築山状遺構** 東西石列の北側をかたち作る。積土によって形成された築山状のたかまり。『大乗院殿境内図』では、この位置に松がおい茂る小山が描かれている。

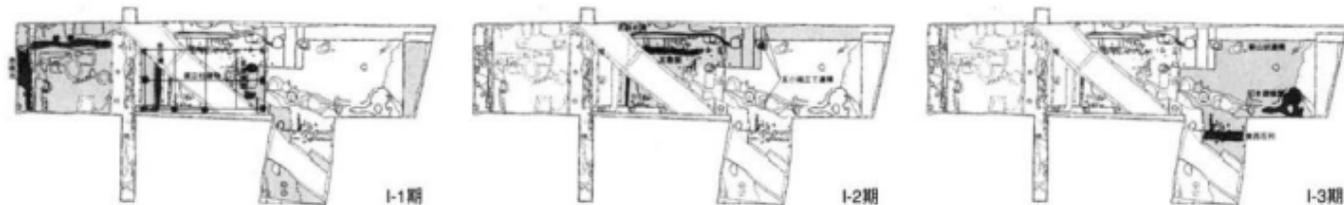


図5 江戸時代の遺構面 北区

## II期 明治時代以降の遺構

### II-1期

大衆院が廃絶となる明治初年から、奈良ホテルが建設される明治40年頃までの間の遺構。

**南北石列** 20cm 大の石を南北に1列ならべた遺構。西側には控柱を立てた柱穴がこの石の位置から、御殿が個人宅となった時に、宅地と東大池池を区切るために設けられた板塀と推定できる。

**埋め遺構** 築山状遺構の南に設けられた、埋め込みの周辺を黄白色の漆喰で固めた遺構。その構造からは便所である可能性がある。

**排水地溝埋設溝** 調査区を斜めにはしる巨大な溝。東大池の水を北西に排水する結果がとれる。明治20年頃に荒池の造成にともなって設けられた可能性が高い。

### II-2期

明治42年の奈良ホテルの開業以降、現在にいたるまでの遺構。

**廃棄土坑** 廃棄物を投棄するために設けられた土坑。ガラス瓶やガラス、煉瓦片など近代の遺物が多数出土。

**テニスコート整地面** 昭和20年(1945)奈良ホテルが水軍に接収された際に設けられたテニスコートの基礎部分。

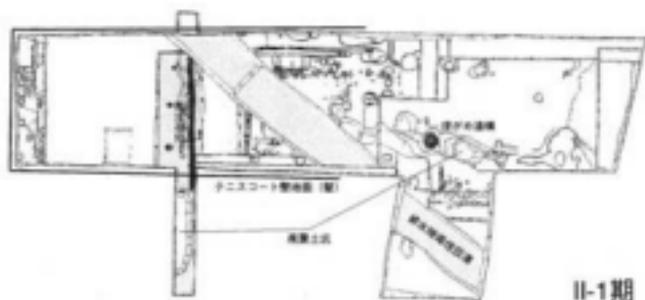


図6 明治時代の遺構面 北区

## 南区

## I期 江戸時代の遺構

**岸辺** 最上層を茶褐色の粘土で形成した東大池西南隅の陸部。現在の東大池の岸辺にくらべ直線的な平面形をしていて、『大乗院殿境内図』に描かれた状況とよく一致する。

**礎面** 池底から岸辺のたちあがり部分にある直径 10cm 大の礎がならぶ面。取水暗渠埋設掘削の壁面ではこの礎面が礎土の下部に延びる様子がうかがえることから、中世以前の東大池底の礎面である可能性も考えられる。

**石列** 調査区の東端、陸部が池にむかって落ち込む部分にある 15cm 程度の石を乱雑にならべた遺構。『大乗院殿境内図』ではこの部分に長方形の敷石を描いており、この地固め石の可能性も考えられる。

**南北溝** 調査区の中ほど、池底から岸辺へのたちあがり部分にある青灰色粘土の地山面をほり込んだ溝。残存状況がわるく詳細は不明だが、江戸時代の護岸に関する遺構か。

## II期 明治時代以降の遺構

**取水口** 池水を取水するための樋門。直径 40cm 大の丸太を加工したもので、上部に 柱による枠を設ける。

**取水暗渠埋設溝** 取水口から西南にくぐる暗渠のための溝。暗渠には明治時代初期につくられた常滑産の陶管を用いる。

**枕列** 岸辺に沿ってならぶ枕列。取水施設の設置より新しく、工事後に護岸を補修した時のものと考えられる。

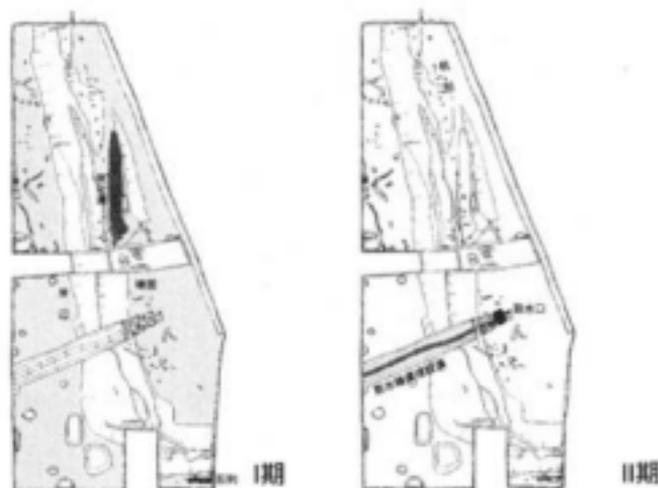


図7  
各期の遺構面  
南区



図8 大乗院四季真景図 (興福寺藏)



図9 大乗院殿境内図 (春日大社 岡本氏藏)

## ・略年表

## 江戸時代以前 大乗院庭園の原形が形づくられる

- 天和元年（1181） 平重衡の南郡焼き打ちで被災した大乗院が現在地に再興される。
- 宝徳3年（1451） 徳政一限により大乗院の大半が焼失する。翌年より復興作業が開始される。
- 寛正4年（1463） 大乗院門跡の尊尊が善阿弥に作庭を依頼する。

## 江戸時代 中世の作庭を基礎に、庭園の景観が整えられる →1.1題

## 【大乗院四季真景園】 →1.2題

北区の付近：「閑歌亭」を中心とした庭園施設

## 【大乗院殿境内園】 →1.3題

北区の付近：松がしげる小高い丘（東西に築地堀がとおる）

南区の付近：直線的な急勾配の護岸

## 明治時代以降 神仏分離・廃仏極釈により、大乗院門跡が廃絶となる →1.1題

- 明治元-14年（1868-1881）頃 大乗院の殿舎、個人宅（松園家）となる。→1.1題  
この頃、園内の多く建物が取り壊し、または売却される。
- 明治7年（1874） 松園家の邸宅の一部を学舎とする（更新舎）。
- 明治16-33年（1883-1900） 松園家の邸宅を取り壊し、跡地を飛鳥小学校にする。
- 明治20年（1887）頃 幸川をせき止めて朝香山の北に寛池を造成、  
大乗院趾の北辺に掘割をととし、排水路とする。
- 明治38年（1905） 奈良市・都ホテル・関西鉄道の三者の間でホテル  
建設の覚書をかかわす。
- 明治39年（1906） 奈良県がホテル用地として大乗院跡地を提供、  
関西鉄道の所有となる。
- 明治40年（1907） 国有鉄道法が施行され、関西鉄道が国有化、  
大乗院跡地は鉄道院の所有となる。
- 明治42年（1909） 朝香山頂を削ぎ、奈良ホテルを建設、営業を開始する。→1.2題